

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

2011年度第1回（通算第12回）研究会

日時：2011年5月7日13時～19時00分

場所：AA研マルチメディアセミナー室（306）

内容：

1) 黒田末寿（AA研共同研究員、滋賀県立大学）『制度の起源』でイメージする制度はどのようなものか？」

2) 西井涼子（AA研所員）「混沌から秩序へ」

内容の要旨

『制度の起源』でイメージする制度はどのようなものか？」（黒田末寿）

1 制度の要件を弛める

曾我亨は、制度の進化的基盤の議論を活性化するために、新制度派経済学派（イェーガー2001）による制度の要件を弛めた新たな「定義」を提案した。すなわち、人間間の相互作用の不確実性を減らすという機能面を固定した上で、制度が人間同士の相互作用のためのルールである点を、個体が同種個体と相互交渉する条件であれ、自然環境に適応することであれば、状況にあわせて行動を調整することに拡張し、つぎのように「定義」する。

「「制度」とは、個体または集団の相互作用を秩序づける環境条件または変化する環境条件」（曾我）

2 相互作用の秩序化の幅広いスペクトル

社会現象でないものも含むこの「定義」は、ナンセンスである。しかし、曾我の真意は別にある。同種個体を含むと含まないに限らず、生物と環境との相互作用はどのレベルのものであろうと、繰り返されると一般にパターン化が生じる。人間社会の制度もそうした相互作用のパターン化の一種としてみれば、さまざまに議論できるだろうという提案なのである。このパターン化には様々なレベルのものが考えられ、幅広いスペクトルをなす。こう解釈した上で、この提案がもつ問題点をいくつか指摘したい。

3 制度の機能の多様性

まず、制度が相互作用の不確実性を減らすという面だけが重視されている点である。

霊長類社会学者が「制度（とりわけインセストタブー）の起源」の考察で呻吟してきたのは、集団のメンバーの「行動を規制する文化」（伊谷 1987）の出現、とくに、タブーを破った個体に対し第三者にネガティブな反応を生じさせる機構の説明であった。

こうした制度の古典的とらえ方に縛られる必要はないにしても、新しい見方を提出するならこれを包摂的に説明するか、誤った見方として反駁しなければならない。経済活動を促進するには、不確実性を減らす機能が本質的重要性を担うだろうが、それは、上記の制度イメージにはさほど重要でないように見える。

相互作用の不確実性を減らすことは、たとえば飼い犬を訓練する主人との間にも見られる現象である。こういう交渉の継続では、両者が相手の反応を自己の行為要素に取り込んで相互作用をスムーズにしていく。しかし、これはコミュニケーションとコードの創出であっても制度ではない。古典的な制度解釈では、行動規制、アイデンティティ創出、情動の統合、第三審級ないし責任転嫁などの機能があげられる。相互作用の不確実性を減らすという観点では、これらを説明できない。

4 Social、Society、「狭気」とルールの所在

相互行為の不確実性が減るという前提には、相互作用しあおうとする主体同士の社交性（あるいは物象化して資本の増殖性、或いは単に主体が環境に積極的に応答する志向性でもよいが）と、そのパターン化（秩序化）が想定されている。それをさまざまな段階で見ようという曾我の提案（という解釈）に向き合うと、相互作用のパターン化はどこからが制度かという以前に、どこからがルールかという問いを呼び起こす。

相互作用にパターンが見られるといっても、構造化された関係（society）に沿った行動と、そこはかたない社交の関係（social）（足立 2010）での自由度が高い振る舞いはちがう。さらに曾我（2010）が記述した、それらと異次元の「狭気」ともいべき敵対する民族の個人間の振る舞いも、突出してはいるが、当事者たちにとってもありうるパターンである。足立がオートポイエーシス発現の social な場として記述した、異種の霊長類同士が寄る混群は、緩やかな関係性の様相を呈してもルールの場ではないし、「狭気」の世界は、それと対極で限られた形しかないが、そこもルールの場と言うには語弊がある。

曾我の提起は、私の解釈では、このように制度の曖昧さやルールのようにルールでなさそうな、「ヨウデナサソウ」な「ノッペラボー」を召喚する。そこに面相を描き入れるのが面白いのは、人間はルール以前の環境応答パターンであっても、それを意識に上らせた途端にさかのぼって「こうするものだ」と位置づけてしまうことにある。つまり、social な場における非構造的応答行動でさえ、ルール（構造化された行為）としてあと

づける動物であることだ。この混同がルールの措定を難しくし、曾我の提起をクリエイティブにする、もっとも面白いところと思う。

5 情動の役割

霊長類の個体の行為に第三者が反応するケースで制度につながりそうなキーの一つは、情動である。情動は一瞬にして集団全体のものになり、それに即応して行動が起こる。人間の場合、他者の行為に対する反応は評価と言えるが、それは情動ないし感情の作用である（ダマジオ 1994）。したがって、タブー破りに対する評価は、情動および他者の行為に対する深い関心によっている。さらに、他者の行動を規範に沿って予期していないと、タブー破りに対する驚愕や怒り・嫌悪が生じないだろう。これは間主観性の構造でもある。

制度の進化的基盤で私が問題にしたいのは、これらの点である。

「混沌から秩序へ」（西井涼子）

2011年3月11日の東日本大震災義後に、東京と実家の広島における雰囲気の違いから、調査地である南タイのサトゥーンとパタニを行き来したときのことを思い出した。パタニでは、毎日誰がいつ殺されるのかわからないような日常を脅かされる日々が続いていた。パタニの友人の家に2・3日滞在した後、サトゥーンに帰ってきたときに、開け放した車の窓から生ぬるい風に、ようやく自分がゆるりとした安穏な気分ひたっていることに気づいた。先ほどまで、いかに自分が緊張していたのかが逆に鮮明に浮かび上がってきた。パタニからサトゥーンまで、マレー半島を東西に横断して距離にして百数十キロ、車で約4時間のところである。パタニでは2004年以来、暴力事件が頻発して戒厳令が施行され、すでに数千人以上の死者が報告されている。

本発表は、次の二点を目的とした。

1. 当たり前のように成立している日常性が、じつは偶然と不確実性の上に成り立っていること、そのつど生成されているアクチュアリティ注目して、潜在性が現実のうらにはりあわされていることを示す。
2. 今回の震災のような激烈な出来事を通して、日常性は破壊される。しかし出来事はとどまらず動いていく。この出来事を突き動かす力とはなんであるのか。人びとが行為する方向性が「希望」と呼べるものなのか。こうした生成の現場を構造や秩序といった既存のものとしてなにもものかに還元することなく、生成の現場にとどまりつづけながら記述すること。

95%が仏教徒であるタイにおいて、ムスリムは、全人口の約5パーセント、300

万人ほどであるといわれ、そのうち4分の3が南タイに居住している。南タイも政治的にほとんど問題になることのない西海岸と、ムスリムの分離独立運動の中心であった東海岸を分けて考える必要がある。現在、東海岸における誰がいつ殺されるのかわからない現実においていかに日常性を保ち、生を前向きに生きているのかは、次の保健所における看護師とムスリムの友人の言葉に集約されている。

看護師「私たちは何も間違っただけをしていない。だからどのようになろうとそれはアッラー次第だ。怖れてばかりいてもどこにもいけない。心を平静に保たなくてはならない。」

友人「私たちの家はここにある。食べるのもここ。死ぬのもここ。何かあったら墓にいくだけ。」

東海岸から西海岸にもどってきたときに、その日常性と現実の落差から、日常性の範囲が、身体として感じる範囲であるということ、しかし、身体的境域を超えてその現実には繋がっているということを感じた。

こうした東海岸の極限状況の中で、いかに人々は希望を見出すことができるのであろうか。そこでは、スポーツや芸術に通底する人間が身体として生きているということ、身体として感じ、出来事の流れに変化をおこす力＝志向性をそこから引き出すことができるということを見出すことができる。それは、受動と能動、「いま・ここ」の出来事の流れ、慣性のもつ力、そこからの離脱する力を示しているであろう。